

**Citation:** Gurusamy KS, Samraj K, Mullerat P, Davidson BR. Routine abdominal drainage for uncomplicated laparoscopic cholecystectomy. *Cochrane Database of Systematic Reviews* 2007, Issue 4. Art. No.: CD006004. DOI: 10.1002/14651858.CD006004.pub3.  
**CRG名:** Hepato-Biliary

### [最新版\(英語版\)はこちら](#)

**英語版最終改訂年月:** 20 August 2007  
**Clib issue No.;** N/U: 2007 issue 4; Update

**背景:** 腹腔鏡下胆嚢摘出術は症候性胆石の主な治療法である。腹腔内液貯留を予防するために腹腔鏡下胆嚢摘出術後にドレインが使用されている。しかし、ドレインの使用により感染合併症が増加し、退院が遅れる可能性がある。

**目的:** 合併症のない場合の腹腔鏡下胆嚢摘出術でのルーチンの腹腔ドレナージの利益と有害性を評価する。

**検索戦略:** Cochrane Hepato-Biliary Group Controlled Trials Register、コクラン・ライブラリのCochrane Central Register of Controlled Trials (CENTRAL)、MEDLINE、EMBASEおよびScience Citation Index Expandedを2007年3月まで検索した。

**選択基準:** 合併症のない場合の腹腔鏡下胆嚢摘出術後のドレナージとドレナージ無しを比較しているすべてのランダム化臨床試験を含めた。ひとつのドレインを別のドレインと比較しているランダム化臨床試験もレビューした。

**データ収集と分析:** 各試験から、特性、方法論の質、死亡率、腹腔内液貯留、疼痛、悪心、嘔吐、入院期間に関するデータを収集した。RevMan Analysisを用いて固定効果モデルとランダム効果モデルによりデータを解析した。各アウトカムについて、ITT解析に基づいてオッズ比(OR)と95%信頼区間(CI)を算出した。

**主な結果:** 患者741例をドレイン(361例)とドレイン無し(380例)を比較するためにランダム化した6件の試験を解析した。介入を必要とした腹腔内液貯留の唯一の患者はドレイン群に属していた。創傷感染はドレイン群で有意に多かった(OR5.86、95%CI1.05~32.70)。ドレナージは悪心を伴ったが、統計学的に有意ではなかった。入院期間はドレイン群の方が長く、手術当日に退院した患者数はドレイン無し群で有意に減少した(OR2.45、95%CI0.00から0.57、1件の試験)。41例の患者を吸引ドレナージ(22例)と閉鎖型能動的ドレナージ(19例)を比較するためにランダム化した1件の試験についてもレビューした。この試験から、疼痛は能動的ドレナージよりも吸引ドレナージで少ないことが示唆されている。

**レビューアの結論:** 待機的腹腔鏡下胆嚢摘出術後のドレインの使用は創傷感染率を上昇させ、退院を遅らせる。腹腔鏡下胆嚢摘出術後のドレイン使用を支持するエビデンスは見いだせなかった。

(監訳 吉田雅博)  
翻訳公開日: 08年1月11日

ご注意: この日本語訳は、臨床医、疫学研究者などによる翻訳のチェックを受けて公開していますが、訳語の間違いなどお気づきの点がありましたら、Minds事務局までご連絡ください。なお、コクラン・ライブラリは年4回改定版が発行されます。Mindsでは最新版の日本語訳を掲載するよう努めておりますが、編集作業に伴うタイム・ラグが生じている場合もあります。ご利用に際しては、最新版(英語版)の内容をご確認ください。